

## 【研究ノート】

# イギリス奴隷貿易手形の引受人に関する分析\*

——18世紀後半リヴァプール奴隷商社の受取手形記録から——

長澤 勢理香

## はじめに

ウィリアムズ (Eric Williams) が奴隷貿易ないしは三角貿易の利潤がイギリス産業革命の重要な資金源となったとするいわゆる「ウィリアムズ・テーゼ」を発表してからすでに半世紀以上が経過した<sup>1)</sup>。1969年にはカーティン (P. D. Curtin)<sup>2)</sup>が一次史料および人口統計学的手法を用いて導き出したカリブ海諸島を含む南北アメリカに上陸した奴隷数を算出し、これによって奴隷貿易がイギリス経済に及ぼしたインパクトを計量的に算出することが可能となった。これを契機として、1970～80年代にかけて奴隷貿易の利潤の多寡をめぐる利潤論争がおこった。しかし、この利潤論争に決着はつかず、研究課題を奴隷貿易数やその利潤だけに狭く限定せず、アフリカ市場や西インド市場に輸出された商品の種類やその額、あるいはイギリスに輸入された砂糖をはじめとする植民地物産の輸入額、三角貿易に関連する産業の発達など、多角的に議論することの重要性が確認されることとなった<sup>3)</sup>。

\* 本研究の一部は日本科学協会笹川科学研究助成の援助を受けた。記して謝意を表する。

1) Williams, E. (1944) *Capitalism and Slavery*, University of North Carolina Press. (ウィリアムズ, エリック (中山毅訳), (1978) 『資本主義と奴隷制: ニグロ史とイギリス経済史』理論社.)

2) Curtin, P. D. (1969) *The Atlantic Slave Trade: A Census*, Madison: University of Wisconsin Press.

3) この一連の経緯については、布留川正博 (1991) 「ウィリアムズ・テーゼ再考: イギリス産業革命と奴隷制」『社会科学』(同志社大学) 第46号が詳しい。

こうした認識は、広く浸透してきている。たとえば池本幸三は、18世紀後半におけるイギリス最大の奴隷貿易港リヴァプールを扱った論考のなかで、奴隷貿易は「西インド、北アメリカ南部植民地の奴隷制プランテーションと結合してこそ意味をもちえた」と述べている<sup>4)</sup>。また上村能弘は、大西洋経済圏をも内在化した世界市場の展開に着目し、大西洋奴隷貿易が世界市場のなかでどのような位置を占めたのかを検討している<sup>5)</sup>。このように、イギリス経済の発展を考える際に、奴隷貿易そのものだけでは地理的にも産業的にも意味をなさなくなってきた。

奴隷貿易研究にはより広域的・多角的な視点が求められており、この方向のなかにおいて奴隷購入の際の支払手段もまた重要な研究対象となろうとしている。ウィリアムズの主張のなかにも奴隷貿易の重要な関連産業の1つとして金融業が設定されている。しかし、奴隷貿易の金融的側面、すなわち奴隷取引の決済の特徴ともいえる為替手形の使用に関する実証的な研究は決して多くはない。

たとえばシェリダン (R. B. Sheridan) は、三角貿易の形態をとっていたイギリスの奴隷貿易が奴隷貿易と砂糖貿易 (植民地貿易) とに分離していき、支払手段も砂糖から為替手形に変化した<sup>6)</sup> と主張した。この為替手形は本国の、特にロンドンのコミッションエージェント<sup>7)</sup> に宛てて振り出された<sup>8)</sup>。奴隷労働力の購入資金として比較的長期の信用<sup>9)</sup> を必要としていた西インド諸島のプラ

4) 池本幸三 (1972) 「リヴァプールと奴隷貿易」『龍谷大学経済学論集』第12巻第1号。

5) 上村能弘 (2008) 「大西洋地域における奴隷貿易の世界市場的連関, 1660-1820年」『経済集志』(日本大学) 第77巻第4号。

6) Sheridan, R. B. (1958) "The Commercial and Financial Organization of the British Slave Trade, 1750-1807," *The Economic History Review*, New Ser., Vol.11, No.2; Sheridan, R. B. (1974) *Sugar and Slavery: An Economic History of the British West Indies, 1623-1775*, Caribbean University Press.

7) コミッションエージェントはしばしば委託代理商と訳されるが、本研究では砂糖の委託販売と奴隷貿易にかかわる為替手形の引受け・支払いを合わせて行った西インド商人のことを指している。

8) Sheridan, R. B. (1958) *op. cit.*, pp.254-256, 260-263.

9) 西インド諸島のプランターにとって奴隷労働力はいわゆる設備投資に相当し、砂糖の収穫まで収入を得ることができない。また、奴隷市場が収縮している時には必然的に手形のユーザンスは長くなる。そのため、西インド手形は主に3カ月から36カ月まで、長期間であるという傾向がみられる。

ンターと、奴隷代金の迅速かつ安定的な支払いを必要としていた奴隷商人双方のニーズを満たす役割をロンドンのコミッションエージェントとが担っていたのであった。

トムズ (D. W. Thoms) もまたロンドンのコミッションエージェントであるミルズ家 (Mills Family) を例に、奴隷貿易の構造変化を経て奴隷貿易の実務はリヴァプール、為替手形による資金決済はロンドンという分業化が進んだと結論付けた<sup>10)</sup>。プライス (Jacob M. Price) は奴隷手形の引受人が手形引受商社 (“accepting house”) の役割を事実上先行したと述べ<sup>11)</sup>、とくにロンドンの引受人の役割を強調したわけではないが、明らかにロンドンの引受人を意識していることがわかる。ペアーズ (Richard Pares) は典型的な西インド商社、すなわちコミッションエージェントであるラセルズ家 (Lascelles family) の歴史を用いてロンドンコミッションエージェントの全体像を描いた。ペアーズもまた、奴隷手形の資金的な後援者 (“financial backer”) としてロンドンの重要性を強調した<sup>12)</sup>。また、モーガン (Kenneth Morgan) は奴隷貿易の送金手段にかんする研究<sup>13)</sup>において、西インド商社すなわちコミッションエージェントはロンドンを中心に栄えていたと主張した。

しかしながら、これらの研究はコミッションエージェントがロンドンに多く存在したことを示すものではあるが、奴隷手形がコミッションエージェントによって集中的に引き受けられていたかという点に関しては実証的に裏付けられたわけではない。奴隷貿易の実相を浮かび上がらせるためにも、この問題について検証することが強く求められる。こうした問題意識に基づき本

---

10) Thoms, D. W. (1969) “The Mills Family: London Sugar Merchants of the Eighteenth Century,” *Business History*, Vol.11, No.1, p.10.

11) Price, Jacob M. (1991) “Credit in the Slave Trade and Plantation Economies,” in Solow, Barbara L.(ed.) *Slavery and the Rise of the Atlantic System*, Cambridge : Cambridge University Press, p.323.

12) Pares, Richard (1961) “A London West India Merchant House, 1740-69,” in Humphreys, Robert. A. and Elizabeth Humphreys (ed.) *The Historian's Business and other Essays*, Oxford: the Clarendon Press, pp.222-223.

13) Morgan, Kenneth (2005) “Remittance Procedures in the Eighteenth-Century British Slave Trade,” *The Business History Review*, Vol.79, No.4, pp. 745-749.

稿は、18世紀後半のイギリス奴隷貿易における為替手形による支払いを資金面や信用リスク負担の面から支えていた引受業務をどのような人々が担っていたかについて、経営文書に基づき実証的に明らかにすることを目的としている。言い換えると、奴隷購入に際しての支払猶予あるいは延払いを必要とした買い手と、確実かつ迅速な入金を求める売り手の双方のニーズを満たすべく機能した手形引受人が実際にコミッションエージェントに集中していたのかどうかを検証することにした。

## 1 奴隷貿易とロンドンコミッションエージェント

イギリスの奴隷貿易は当初、イギリスから出航した奴隷船が西アフリカの他でビーズ、綿織物や宝貝などの商品との交換で奴隷を買い付け、その奴隷を西インド諸島のプランターに販売したのち代金として砂糖をはじめとしたプランテーション作物、正貨 (specie)、もしくはそれらと為替手形を組み合わせたものを受け取っていた。英領西インドでは正貨は慢性的に不足していたほか磨耗した悪貨も流通していたため、奴隷貿易の決済手段として正貨が単品で用いられることはほとんどなかったからである<sup>14)</sup>。

その後18世紀中ごろになるとイギリスでの砂糖などの植民地物産に対する消費需要の拡大を背景として、より効率的な供給を目指して砂糖は新たに建造されたいわゆる砂糖専用船によってイギリスに輸送されるようになった。これに伴い三角貿易は、イギリス・西アフリカ・西インド諸島間の奴隷貿易と西インド諸島・イギリス間の砂糖貿易とに分離し、前者の業務に従事した奴隷船は奴隷の売上代金を為替手形で受け取ったのちそのまま本国へ帰還することが多くなった<sup>15)</sup>。このようにして18世紀半ば以降、イギリスの奴隷貿

14) 英領カリブ海諸島にはミントがないなど、成熟した貨幣制度が整備されていなかった。外貨の流入も十分ではなかったほか、貶質したコインも流通していた。このように貨幣制度が未発達であったことに加えて、敵国の私掠船に拿捕される可能性もあり、奴隷貿易の代金として現金を用いることは一般的ではなかった。Morgan Kenneth (2005) *ibid.*, pp.720-721.

15) ただしこれについてはミンチントンは、三角貿易型の奴隷貿易を続けて砂糖による支払いを得た奴隷船は完全に消えたわけではないとして部分的に否定している。Minchinton, W. E. (1979)

易にかかわる代金の支払いについてはもっぱら為替手形が利用されるようになった。これがシェリダンによる三角貿易の分離説<sup>16)</sup>である。

奴隷商人はもともと、リスク分散のため航海ごとに数人でパートナーを組んで奴隷貿易に従事していた。加えて、彼らは、自ら奴隷船に乗りこんで奴隷を英領植民地で販売するというよりも、運営資金を拠出することに専念した。ただし実際には一人前の奴隷商人として奴隷貿易の事情を知るために、彼らは船長として奴隷貿易航海に参画することもあった。したがって、奴隷貿易にかかわる実務は船長に委ねられる一方で、英領植民地で奴隷を販売するに際しては現地の奴隷ファクターを介してプランターに販売していたのであった。このように奴隷商人と奴隷船船長の業務は切り離して考えるべきであり、奴隷商人の業務は基本的には奴隷貿易を毎回組織し、出資者を募り、本国にとどまりながら航海中の奴隷船に指示を出すことにあった。

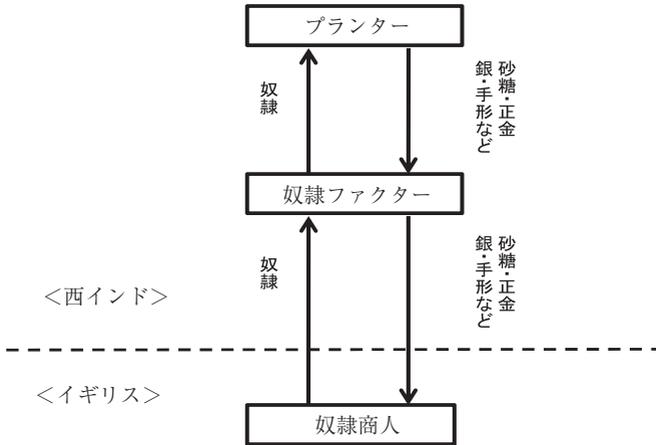
第1図は、シェリダンの研究をもとに18世紀中ごろまでのイギリスの奴隷貿易取引の支払手段の構造を図式化したものである<sup>17)</sup>。この図からも明らかのように、西インド諸島での奴隷売買は18世紀半ばまでの間、「現物決済」を基本としていた。すなわち、イギリスを出発した奴隷船は、西アフリカにおいてイギリスからの輸出品との引き換えで黒人奴隷を調達し、その奴隷を英領西インドにおいて奴隷ファクターを通じてプランターに販売し、砂糖をはじめとする植民地物産や正貨、手形、あるいはそれらの混合物で支払いを受け、奴隷船はこれらの植民地物産や混合物を積載してイギリス本国に帰還した。いわゆる三角貿易として知られる貿易形態である。

18世紀半ばごろに三角貿易の構造が奴隷貿易と砂糖貿易に分離するなか、第2図が示すように、ロンドンのコミッションエージェントを名宛人として奴隷ファクターにより振り出された為替手形が奴隷貿易の決済手段の主流に

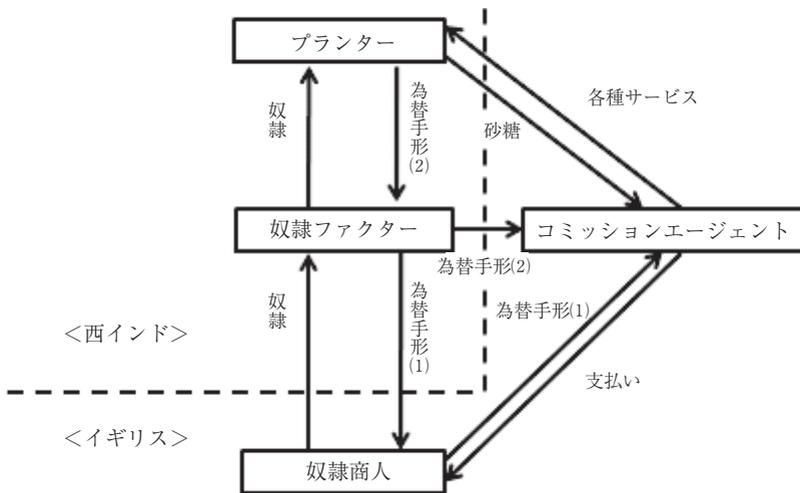
↘ “Triangular Trade Revisited,” in Gemery, Henry A. and Jan S. Hogendorn (ed.), *The Uncommon Market: Essays in the Economic History of the Slave Trade*, New York: Academic Press, pp.334-351.

16) Sheridan, R. B. (1958) *op. cit.*

17) Sheridan, R. B. (1958) *ibid.*



第1図 18世紀中ごろまでのイギリス奴隷貿易の決済構造  
 (出所) Sheridan, R. B. (1958) *op. cit.* をもとに筆者が作成.



第2図 18世紀後半以降のイギリス奴隷貿易の決済構造

(出所) Sheridan, R. B. (1958) *ibid.*, pp.254-256, 260-262; Sheridan, R. B. (1974) *op. cit.*, pp.282-294; Price Jacob M., (1991) *op. cit.*, pp.311-315 をもとに筆者が作成.

なった。名宛人に指名されたコミッションエージェントは為替手形にサインをすることで手形引受人となって、満期日に手形に記載された金額を受取人あるいは手形の持参人に支払う<sup>18)</sup>。その際、コミッションエージェントは手形を引き受けて信用リスクを負担することの対価として手数料を得ていた。とくに本稿でいうコミッションエージェントとは、奴隷の買い手であり砂糖の生産者でもある西インド諸島の砂糖プランターからの委託を受けて、砂糖の輸送やイギリス国内での販売に従事する卸売商人のことをいう<sup>19)</sup>。砂糖の売上代金は彼らが手許で管理しているプランターの預金口座に入金されるため、これを引き当てとして奴隷代金支払いのために振り出された為替手形を引き受けていたのである。このように、ロンドンのコミッションエージェントは、西インド諸島のプランテーションで生産された砂糖の委託貿易で手数料を得ると同時に、奴隷貿易において振り出された為替手形の引受業務を通じても手数料を得ていたのである<sup>20)</sup>。

加えて、プランターも砂糖の売上代金を引き当てとして為替手形を振り出した。プランターは収穫した砂糖の販売をロンドンのコミッションエージェントに委託していたため、この手形はその売り上げをもとにして奴隷買い取り代金の支払いをコミッションエージェントに求める支払指図として機能していた。つまり、奴隷貿易では西インドにおいて奴隷ファクターとプランターそれぞれが機能の異なる手形を振り出し<sup>21)</sup>、それらは本国のコミッションエージェントあてに送付されたうえで支払われたのである。奴隷ファクターが奴隷商人を受取人として振り出した手形(1)は奴隷代金に対するものであった一方で、プランターによる手形(2)は自身の砂糖売上によって口座に蓄積さ

---

18) Gillett Brothers Discount Co. Ltd. (1964) *The Bill on London, or the Finance of Trade Bills of Exchange*, London: Chapman & Hall, p.11, 91, 93. (富士銀行外国部訳 (1967) 『ロンドンにおける手形取引』 13, 97-98 頁.)

19) とくに砂糖委託業務に関しては、川分圭子 (2005) 「英領西インド貿易とロンドン委託代理商業の成長」『京都府立大学学術報告 (人文・社会)』 第 57 号が詳しい。

20) Sheridan, R. B. (1974) *op. cit.*, pp.290-294.

21) Price, Jacob M. (1991) *op. cit.*, pp.311-315.

れる利潤から手形(1)を返済するための支払指図ともいべきものだと考えられる。プライスによる説明では構造を簡潔に説明するためであろうか、手形(1)の支払人兼引受人と、プランターの砂糖売上口座を管理していた手形(2)の支払人兼引受人とをとくに同一人物であるとは述べられていない<sup>22)</sup>。しかし実際にはどちらであっても奴隷貿易と砂糖貿易の決済は為替手形によって済ませることができる。最終的な買い手ではない奴隷ファクターが奴隷手形を振り出すこと自体、一見奇妙に感じられる。しかし単なる販売代理人であったファクターは多くの責任を負わされ、実質的な買い手となった<sup>23)</sup>。それでも奴隷を消費するのは奴隷ファクターではなくプランターであり、最終的に支払いにあてられる砂糖の売上げもプランターのものである。奴隷ファクターもコミッションエージェントも、プランターの砂糖の売上げを勝手に使うことはできない。そのために必要となるのが手形(2)であった。

そして確実な支払いを求め、なおかつ容易な手形の流通を求める奴隷商人の間では、信頼あるロンドンコミッションエージェントとパートナー関係にある奴隷ファクター(“factor-partner”)が振り出した為替手形のほうが、プランター自らが振り出した手形よりも好まれたのである<sup>24)</sup>。

この新しい取引構造のもと、西インド諸島において奴隷船は奴隷ファクターを通して奴隷を供給し、その対価として作物の代わりにファクターが振り出した為替手形を受け取り、為替手形とバラストを積み込んでイギリスへ帰還した。奴隷船とともにイギリス本国へ到着した手形は、その名宛人であるロンドンの西インド商社いわゆるコミッションエージェントに呈示され、プランターからの支払指図が確認された後、コミッションエージェントは引受けのサインを行うとともに、手形に記載された支払日に現金を支払った。ただし、コミッションエージェントが引き受けた為替手形は実際にはそれを待た

22) Price, Jacob M. (1991) *ibid.*, p.315.

23) Sheridan, R. B. (1974) *op. cit.*, pp.292-293 ; Pares, Richard (1961) *op. cit.*, 1740-69, pp.222-223; ただし、あくまで自己勘定で奴隷を輸入しなかった。

24) Sheridan, R. B. (1958) *op. cit.*, p.261.

ず他の取引相手に譲渡されることもあったが、図中では基本的な奴隷貿易の決済構造を示すことや、本研究では引受人の実態の解明に重点がおかれているため、そうした可能性については割愛している<sup>25)</sup>。

この間、コミッションエージェントは西インド諸島のプランターとの間で交わされた委託売買契約に基づき、西インド産の砂糖をプランター名義でロンドンにおいて販売した。それらの売上代金はコミッションエージェントが管理するプランター名義の預金に入金される一方で、砂糖委託にかかわる諸経費<sup>26)</sup>や手数料<sup>27)</sup>が口座から引き落とされた。また、コミッションエージェントはそのほかにもプランターの希望に応じて各種サービス<sup>28)</sup>を行い、それらにかかわる費用も引き落とされた。このようにして18世紀中ごろを境に奴隷貿易と砂糖貿易が分離するなかで、それぞれの貿易取引についてはいずれもロンドンのコミッションエージェントを中心に決済されていた。

シェリダンはまた、コミッションエージェントの特徴をとらえるため、1740年から1755年までのロンドン在住の172人<sup>29)</sup>の砂糖委託商すなわちコミッションエージェントのうち25社を選び出した。それらにみられる特徴として、婚姻や居住歴などの情報から英領西インド諸島との強い結びつきを有していることがわかった。<sup>30)</sup>

このようにシェリダンの研究では、コミッションエージェントの業務や特

---

25) 本研究はイギリスにおける手形の流通や普及、決済というより、支払手段としての為替手形による奴隷取引決済に焦点を当てている。そのため引受けのなされた奴隷手形を、奴隷商人が満期の到来を待つ場合とそれを待たずして割り引いてもらう場合とを分けて考えない。そして奴隷手形については、分析対象を特にダヴェンポート商会を受取人としている手形に絞っていないことから、他の奴隷商人を受取人として振り出された奴隷手形が裏書譲渡の末にダヴェンポート商会が受け取ったものであっても、当初の奴隷取引に伴う為替手形として分析の対象とした。

26) 船舶チャーター、倉庫、関税、保険等に関わる費用。

27) 手数料は為替手形の引受けと支払いに0.5パーセント、砂糖委託では2.5パーセントであった。Sheridan, R. B. (1958) *op. cit.*, p.262.

28) 例えばプランテーションで必要となる道具、生活用品、贅品の発送、白人年季奉公人のリクルート、プランター子弟のロンドンにおける教育など、臨機応変なサービスが提供された。

29) このうち36人は個人事業主、残りの136人は56社のパートナーであった。

30) Sheridan, R. B. (1974) *op. cit.*, pp.282-305.

徴、その重要性についても議論されており、その意味で奴隷貿易の資金決済を担っていたコミッションエージェントに関する重要な研究ともいえる。ただし、これらの研究のなかで取り上げられた資金決済は奴隷貿易にともなう振り出された手形のうちコミッションエージェントを名宛人とする為替手形にかかわるものであり、奴隷手形全体を対象としているわけではない。そのため、奴隷貿易にかかわる為替手形の引受けそれ自体があたかもロンドン（とブリストルの一部）のコミッションエージェントに集中していたかのような印象を与える。しかしながら、奴隷貿易の為替手形がほぼすべてコミッションエージェント宛に振り出されたのかどうかという点に関しては、管見の限り、これまでのところほとんど議論されていない。

ところで、18世紀後半の典型的な奴隷商人の経営文書を用いた統計的な研究はきわめて少なく、アンダーソン（B. L. Anderson）による研究<sup>31)</sup>は貴重な研究の1つといえる。彼は、18世紀後半に活躍したりヴァプール所在の有力奴隷商社であるダヴェンポート商会（William Davenport & Co.）の経営活動を、同社が受け取った手形の記録を使用して明らかにした。具体的には、(1) ウィリアム・ダヴェンポートの人物像、(2) 政治情勢や戦争から同社が受けた影響、(3) 受取手形の振出地別分析とランカシャー地方での流通、からなっている。

本研究が課題とする為替手形を用いた奴隷貿易の決済に関係しているのは(3)である。アンダーソンは同社の受取手形の枚数や額面総額を基準として、年度ごとの内国・外国手形の受取状況を分析のうえ、次のような結論を導いた。すなわち、外国手形の占める比率は時期により上下するが、枚数では内国手形の比率が高い一方、金額では外国手形の比率が高い傾向があった。ただし、受取手形の枚数や金額をもとにした比率には多少の留意が必要となる。なぜなら、奴隷貿易においては通常、1回の奴隷取引に対して投資家人数や期間を基準として複数のトランシェに分けた手形が振り出された。そのため奴隷

31) Anderson, B. L. (1977) "The Lancashire Bill System and its Liverpool practitioners: The Case of a Slave Merchant," in Chaloner, W. H. and B. M. Ratcliffe (ed.), *Trade and Transport: Essays in Economic history in Honour of T. S. Willan*, Manchester University Press.

貿易の支払いを目的とした為替手形と、その他のヨーロッパ貿易で振り出された手形やイギリスで振り出された内国手形の枚数を同じ基準で考えることはできないからである。このことについては、次章であらためて検討したい。アンダーソンがダヴェンポート商会の受取手形の流通や性質を明らかにしたのに対し、本研究は同社の手形記録をもとに奴隷手形の引受人の実態を浮き彫りにすることを目指している点で異なる。

これまでの研究では、ロンドンやブリストルなどの西インド商社が手形引受を行った事例が取り上げられてきた。本稿ではこれまで注目が向けられてこなかったリヴァプール奴隷商人による手形引受について検討する。

## 2 ダヴェンポート商会の受取手形からみた奴隷貿易手形引受の実態

17世紀半ばに始まったイギリス奴隷貿易の中心地は時代とともに変わり、ロンドンからブリストル、ブリストルからリヴァプールの順にしたがって移動したとされる。実際、奴隷貿易が始まった初期には王室の管理下で王立アフリカ会社（Royal African Company）が奴隷貿易を独占的に運営していたため、その所在地であるロンドンが中心地であった。しかし1698年にアフリカ会社による貿易独占の終了を受け、18世紀に入るとロンドン以外の港においても合法的に奴隷貿易が営まれるようになった。池本幸三氏は18世紀のイギリス奴隷貿易の発展を、「17世紀後半の特権的・前期資本たる王立アフリカ会社の独占が、私商人に開放され、フランス商人をライバルとして、イギリス全体の『国民的独占』を目指す性格に変質した」と表現した<sup>32)</sup>が、まさに開放とともにイギリスの奴隷貿易量は急増した。そうしたなか、輸出品の収集力<sup>33)</sup>

32) 池本幸三(1971a)「18世紀イギリス奴隷貿易の一考察——事例研究と統計的分析——」『龍谷大学経済学論集』第11巻第1、2号、296頁。

33) 池本によれば、ブリストルの優位性は地理的・経済的なものであった。同市はとくに地域的に独立した市場圏を持っており、輸出入商品の集散地として奴隷貿易に有利な条件が備わっていた。ただし産業革命に向けて全国市場を形成するほどの工業は育成されなかった。池本幸三(1971b)「ブリストルと奴隷貿易」『龍谷大学経済学論集』第11巻第3号、100-101頁。

において優位的な立場にあったブリストルや価格競争力<sup>34)</sup>を持つリヴァプールにおいて奴隷貿易が発展することになった。リヴァプールからの奴隷船出航数は18世紀半ば以降、アメリカ独立戦争の時期を除き、おおむね右肩上がりの成長を遂げた。その一方でロンドンからの出航数は増減を繰り返しながらも、リヴァプールに大きく差をつけられ、後塵を拝するようになった。ブリストルは1730年代をピークにその後漸減した。その結果、18世紀後半のイギリスの奴隷貿易の実務は実質的にはリヴァプールが担っていたのである<sup>35)</sup>。

この章では18世紀後半のリヴァプール奴隷商人が行った奴隷取引において受け取った為替手形の引受人の分析を通じてロンドンコミッションエージェントによる奴隷貿易手形の引受ビジネスの実際とその役割などについて検証する。分析に際してはアンダーソンによる研究でも使用された奴隷貿易商社の経営文書である *The Papers of William Davenport & Co., 1745-1797*<sup>36)</sup> 所収の受取手形記録を利用し、奴隷貿易に伴って振り出された為替手形の引受人の所在地や職業などを考察することにした。ウィリアム・ダヴェンポート (William Davenport) は18世紀後半、奴隷貿易の最盛期を迎えたリヴァプールで奴隷貿易やイタリアビーズ貿易、そしてワイン貿易を生業としていた。ヴェネチアンビーズや宝貝は奴隷貿易の際の輸出品あるいは交換商品として西アフリカ地域で人気があったことはよく知られている。彼のビジネスの中心は奴隷貿易であり、一生を通じて160回の奴隷貿易に関与し、計120,000ポンド以上の資金を投じたと考えられている<sup>37)</sup>。受取手

34) リヴァプールの奴隷商人はロンドンやブリストルの商人と比較して、奴隷貿易のコスト削減に努めていた。例えば船長や船員の給与体系が根本的に異なるため、人件費は低く抑えられた。また、リヴァプールの港湾使用税は他港に比べて安く、運賃払戻金制度もなかった。その結果、リヴァプール商人は奴隷を1人当たり4～5ポンド安く販売することができた。Williams, Gomer (2004) *History of the Liverpool Privateers and Letters of Marque: with an Account of the Liverpool Slave Trade, 1744-1812*, Montreal: McGill-Queen's University Press, p.471.

35) たとえば1795年には、リヴァプール港に属する奴隷船がイギリスにおいては8分の5を占め、ヨーロッパ全域で考えると7分の3を占めていたという証言がある。池本幸三 (1972) *op. cit.*, 62頁。

36) *The Papers of William Davenport & Co., 1745-1797*, Reel 3, Microform Academic (1998).

37) Richardson, David (1998) "A Brief Introduction to the Microfilm Edition of the William Davenport Papers," *The Papers of William Davenport & Co., 1745-1797*, Wakefield: Microform Academic, pp.1-2.

形記録には同社が受け取った手形の情報を写した記録書が収められており、当時の奴隷手形がどのような人物によって引き受けられていたのかを知るうえで有用である。

## 2.1 ダヴェンポート商会の受取手形帳の概要

ダヴェンポート商会の勘定書によると、同商会のオーナーであるウィリアム・ダヴェンポート（William Davenport）は、リヴァプールで1757年から1785年までの間、奴隷貿易に参画していた<sup>38)</sup>。投資回数は時期によりばらつきがみられるが、比較的長期にわたって奴隷貿易に携わってきた商人であり、奴隷貿易の繁栄期に活動した典型的なりヴァプール奴隷商人であるといえる。

最初に、受取手形記録の形態を紹介したい。使用する記録文書には、1769年から1787年までの18年間に同商会が受け取った為替手形や約束手形に関わる情報が書き写されている。ただし手形の現物は残っていない。こうした情報はほぼ手形の振出日順に記録されており、振出日（when drawn）、振出地（where drawn）、ユーザンス（date）、受取人（被支払人）氏名（whose favor）、振出人氏名（drawer's name）、引受人氏名（on whom drawn）、額面（value）、満期日（when due）などからなる。ただし、どのような取引（商品）に伴って振り出された手形の情報であるのかという点に関しては、残念ながら確認できなかった。そのため、受取手形記録全体から奴隷貿易手形を抽出するに際しては、振出地を基準とすることにした。先に述べたようにダヴェンポート商会はヨーロッパ貿易にも従事していたため、受取手形の過半数は、ヨーロッパ諸国を振出地とするものおよび内国手形が裏書譲渡されたのちに当該商社にわたったものから構成されていた。

そのため、受取手形は合計3,000枚弱にもほるが、外国を振出地としてある手形は710枚にとどまる。この外国手形のうちヨーロッパ地域とアフリ

---

38) Anderson, B. L. (1977) *op. cit.*, p.78.

カ地域を除きたいいわゆる「新世界」を振出地としている手形は484枚である。これらの「新世界」手形は、すべて奴隷の販売地である西インド諸島および北米植民地において振り出されていた。そのなかには約束手形が9枚含まれており、為替手形の引受人を調査対象とする今回の研究ではそれらを除外する必要がある。それゆえ本稿では、約束手形9枚を差し引いた475枚を奴隷貿易の支払いのために振り出された為替手形とみなし<sup>39)</sup>、これらの手形にかかわる情報に基づき奴隷手形の引受人がロンドンコミッションエージェントによってどの程度占められていたのかを明らかにする。

奴隷手形の分析に入る前に、当該手形にかかわるもう1つの特徴を確認しておきたい。前章で述べたように奴隷貿易は多くの場合、複数の出資者によって投資されるという取引形態を反映して、1回の取引に対して出資者ごとに複数枚の為替手形が振り出された。例えばダヴェンポートも出資した1779年のホーク号による航海では、奴隷368人の売上高が9,909ポンド、同船による翌年の航海では奴隷337人の売上高が9,830ポンドであった<sup>40)</sup>。このように1回の奴隷取引に巨額の資金が動いていたのである。

上記のように1回の奴隷貿易で奴隷はおおよそ200～400人が輸送された。しかし、これらを1つのプランテーションがまとめて買い取ることはめったになかったため、通常は西インド諸島の奴隷ファクターが仲介して販売された。奴隷ファクターは奴隷の対価として、イギリスの奴隷商人を受取人とする為替手形を振出した。この時、満期日が複数回（通常3～4回）に分かれるようにユーザンスを複数期間設定し、それに応じて複数枚の手形が振り出さ

39) 西インド諸島のプランテーションでは奴隷の他に農業用具から家畜、嗜好品、食料まで輸入していたが、同社のホーク号の勘定書に記載の積荷を見る限り、関係ありそうな品目もプランテーション用輸出品ではなく西アフリカにおいて奴隷と交換するための輸出品であったことがわかる。またプランテーションからの要求に応じて送った商品の手形が、同社のもとに渡る可能性も高いとは考えられない。そのため、新世界で振り出された手形を奴隷販売に伴うものとみなした。Hyde, F. E., B. B. Parkinson and Sheila Marriner (1953) "The Nature and Profitability of the Liverpool Slave Trade," *Economic History Review*, 2<sup>nd</sup> Ser., Vol.5, No.3, pp.375-377; また、アンダーソンによる研究でも西インド振出の為替手形を奴隷手形として扱っている。Anderson, B. L. (1977) *op. cit.*, p.68.

40) Hyde, F. E., B. B. Parkinson and Sheila Marriner (1953) *op. cit.*, pp.375-377.

れた<sup>41)</sup>。そうすることで巨額の支払いを分割する効果があった。また、奴隷貿易手形は、先に指摘したように、出資比率で案分した額面で人数分だけ振り出されるのが一般的な形態であった。その結果、奴隷貿易で1人の奴隷ファクターから振り出された為替手形の枚数は、満期日の回数と出資者人数の積として計算される。

それゆえ、本稿で使用する受取手形記録に記入されている奴隷手形の情報を分析するに際しては、そういった奴隷手形に独特な取り扱いを考慮のうえ分析を取り進めることが求められる。例えば、ダヴェンポート商会の受取手形の記録を用いる際には以下のような注意が必要となる。1回の航海ごとに複数の出資者が集まり共同投資することが一般的であった奴隷貿易では、毎回「シッパスハズバンド」(“ship’s husband”)と呼ばれる代表者が出資者の中から選ばれる。シッパスハズバンドは、資金だけを提供する他の出資者とは異なり、奴隷貿易に関する事務作業などを代表して取り進める。そうした作業のなかには出資比率に応じた利潤配分も含まれる。このことを考慮すると、同一日に同じ振出地において同一振出人によりダヴェンポート商会以外を受取人として振出された何枚かの手形は、ダヴェンポート商会がシッパスハズバンドを務めた取引における他の共同出資者の取り分と考えられる。

一方、ダヴェンポート商会を受取人とする手形のみが記録されている場合、同商会はシッパスハズバンドをつとめず、彼の取り分として最終的に分配された手形だけが記録されたと考えられる。これらの2つのケースの奴隷手形が受取手形記録には混在しているため、手形の枚数や額面金額を単純に合計したものを基準としてコミッションエージェントが引き受けた為替手形の枚数や金額の多寡を議論すると、その実態を見誤るおそれが強い。前者のケースでは他の共同出資者の受け取る手形の枚数や金額まで含めてしまう一方、後者のケースではそれらを排除してしまうからである。このほか、受取手形記録にはダヴェンポート商会が直接出資していない奴隷貿易で振り出された

41) Price, M. Jacob (1991) *op. cit.*, p.315.

手形も見られた。このタイプの手形は、他の奴隷商人が投資した奴隷貿易において振り出された手形が別の取引の支払手段としてダヴェンポート商會に譲渡されたものと考えられる。

このように同社の受取手形記録にある奴隷手形はさまざまな理由で彼のものに渡ったものであり、先に指摘した問題の発生を回避するとともに取引実態のより適切な把握を狙いとして、本稿では手形の枚数や額面金額については、単純集計に代えて引受回数を基準に採用のうえ集計することにした。もうすこし具体的にいうと、(1)振出地が同一である、(2)振出日が同一である、(3)引受人が同一である、という3つの基準をすべて満たした複数枚の奴隷手形については1回の奴隷取引によるものと判断のうえ、引受けの回数を計算することにした。

## 2.2 奴隷手形引受の実態

次に、ダヴェンポート商會の受取手形の引受人に注目し、実際にロンドンのコミッションエージェントが占める割合が高いのかどうかを確認する。その際、受取手形記録の引受人欄にある氏名や商社名を先行研究や18世紀後半のディレクトリーと1件ずつ付き合わせて確認するという方法を採用のうえ、彼らがロンドンのコミッションエージェントであるか否かを確認した。ただし、身元が突き止められなかった者や商社も存在した。このようにして「新世界」手形475枚のうち384枚において氏名が記載された引受人47人の身元を確認することができた。この47人はあわせて143回の引受業務を行っていた。一方、引受人の氏名が解読できたものの身元が確認できなかったり、資料の文字が不鮮明なために読めなかったりした手形は91枚あり、それらについては当然都市や職業も割り出せないため、分析から除外することにした。

第1表は「新世界」手形の枚数、引受回数、引受人数を都市別に引受人ごとに分類した内訳を示したものである。この表からも明らかなように、ロンドン商人は合計194枚の為替手形を21名(商社)で延べ60回引き受けた。一

第1表 「新世界」を振出地とする為替手形の枚数、総額、引回数、引受人数

|            | 手形枚数 | 総額（ポンド）*1 | 取引回数 | 引受人数 |
|------------|------|-----------|------|------|
| ロンドン引受人    | 194  | 123,147   | 60   | 21   |
| リヴァプール引受人  | 143  | 28,176    | 66   | 20   |
| その他の都市の引受人 | 47   | 15,461    | 17   | 6    |
| 不明*2       | 91   | 42,828    | 57   | —    |
| （そのうち解読不能） | (14) | (3,295)   | (14) | —    |
| 計          | 475  | 209,612   | 200  | —    |

(注) \*1：シリング以下は切り捨て。

\*2：手書き文書が破損しているために氏名が解読不能であるものや、ディレクターや先行研究から居住地が割り出せない引受人。

(出所) *The Papers of William Davenport & Co., 1745-1797*, 1998 より筆者が作成。

方、リヴァプール商人は合計 143 枚の為替手形を 20 名（商社）で延べ 66 回引き受けた。その他の港においては、ブリストルでは 41 枚の為替手形を 4 社が 14 回、またランカスターでは 5 枚の為替手形を 1 名が 2 回、そしてグラスゴーでは 1 枚の為替手形を 1 社が 1 回引き受けていた。<sup>42)</sup>

以上のとおり、第1表で示した奴隷手形の枚数や金額に着目すると、確かにロンドンを引受先とする手形が圧倒的な比重を占める。しかしながら、引回数と引受人の人数を基準とした場合、その様相は大きく異なり、ロンドンを引受先とする為替手形とリヴァプールを引受先とする為替手形との間には顕著な相違がみられない。このように引回数と引受人の人数を基準とす

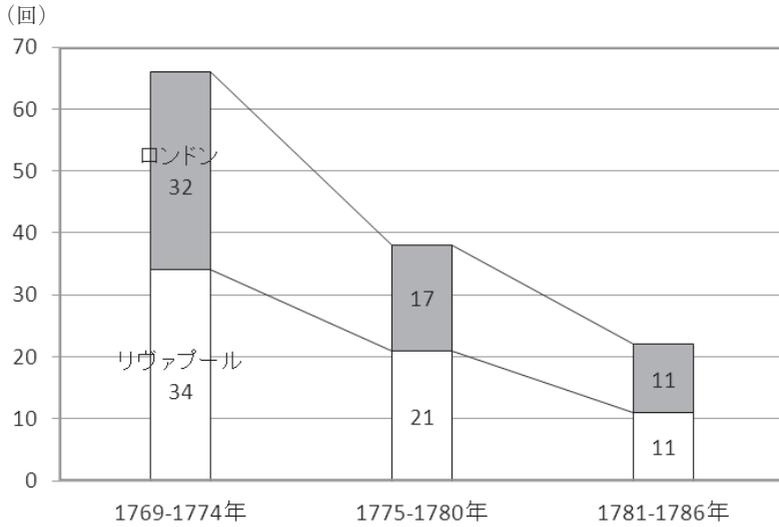
42) ブリストルのトーマス・ダニエル商会 (Thomas Daniel & Son)、デイヴィスプロザロー商会 (Davis & Protheroe)、サミュエル・デルプラット (Samuel Delpratt)、サミュエル・スパン (Samuel Span) はすべて西インド商人 (コミッションエージェント) であった。Morgan, Kenneth (1993) "Bristol West India Merchants in the Eighteenth Century," *Transactions of the Royal Historical Society*, 6<sup>th</sup> Ser., Vol.3, p.192, 200; Morgan, Kenneth (2004) *Bristol and the Atlantic Trade in the Eighteenth Century*, Cambridge University Press, pp.186-187, 191; ランカスターのジョン・サターズウェイト (John Satterthwaite) は奴隷商人であった。Elder, Melinda (2008) "The Liverpool Slave Trade, Lancaster and its Environs," in Richardson, David, Anthony Tibbles, and Suzanne Schwarz (ed.) *Liverpool and the Transatlantic Slavery*, Liverpool University Press, pp.131-132; グラスゴーのアレクサンダー・スピーアーズ商会 (Alexander Speirs & Co.) は著名なタバコ商人であった。Devine, T. M. (1976) "A Glasgow Tobacco Merchant during the American War of Independence: Alexander Speirs of Elderslie, 1775 to 1781," *The William and Mary Quarterly*, 3<sup>rd</sup> Ser., Vol.33, No.3.

ることでリヴァプール商人も奴隸手形の引受けにおいて重要な役割を演じていたという、手形の枚数や金額を基準とした先行研究では見えなかった事実が新たに浮き彫りになった。

それでは、これまでの奴隸貿易研究においてはなぜロンドン所在のコミッションエージェントだけが為替手形の引受人として注目を集めていたのだろうか。この点を確認するべく、受取手形記録のなかで「新世界」手形の受取りが確認された1769年から1786年までの18年間に3つの期間に分けてロンドンとリヴァプールの引受人の行動様式の類似点や相違点を分析する。

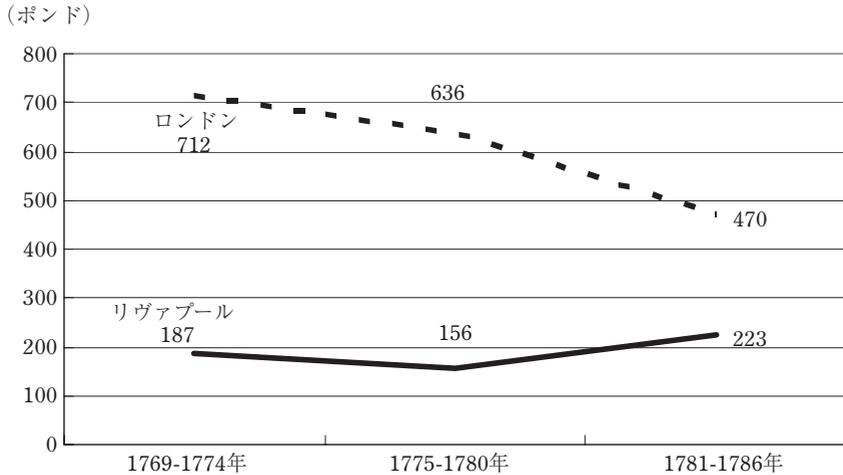
第3図、第4図はこうした観点から作成されたものであり、それぞれ身元が確認できた商人が引受人となった事例の回数と、それらの手形一枚当たりの金額の推移が示されている。このうち第3図はロンドン、リヴァプールという2都市在住の商人による奴隸手形の引受回数の時系列的な推移を示したものであり、同図からは第1期（1769～74年）、第2期（1775～80年）ともにリヴァプール商人による引受回数がロンドンのそれを上回り、第3期（1781～86年）では両者同じ回数であった。全期間を通して両者とも取り扱い量が減少しているが、第2期から第3期はちょうどアメリカ独立戦争の時期に相当するため、奴隸貿易自体が影響を受けたと考えられる。

次に手形1枚当たりの金額では、第4図が示すように各期間ともロンドン引受手形がリヴァプール引受手形を大きく上回っていたことが確認できた。度々指摘しているように、すべての手形が記録されているわけではないため、手形の平均額面金額がそのまま引受人の資金力を反映していると判断することはできない。それでも、ロンドンの引受人はリヴァプールの引受人に比べて高額の手形を引き受けていたということはわかる。この事実は、奴隸手形の引受けに際し、比較的大口の取引はロンドン、小口取引はリヴァプールというように一種の棲み分けができていた可能性を示唆している。その一方で、時間の経過とともに、両者の差が縮小したことも注目に値する。リヴァプールも漸次、手形の引受けに際し、より重要な役割を果たすようになったのである。



第3図 奴隷手形の都市別引受回数

(出所) *The Papers of William Davenport & Co., 1745-1797, 1998* より筆者が作成。



第4図 奴隷手形1枚あたりの都市別平均金額

(出所) *The Papers of William Davenport & Co., 1745-1797, 1998* より筆者が作成。

以上のように、ダヴェンポート商会の受取手形記録を分析した結果、奴隷手形の引受市場はロンドンに集中していたわけではなく、リヴァプールもロンドンと同等かそれ以上の頻度で参加していたことが今回、新たに明らかになった。この分析結果は奴隷手形の引受業務はロンドンのコミッションエージェントに集中したという従来のシェリダン仮説を否定するようにみえる。しかし、手形の額面金額から推測すると、ロンドン引受手形は大口取引が中心となっていた一方で、リヴァプールの引受人は小額手形を取り扱うというかたちで一種の棲み分けがなされていたのではないかと推測される。この点を検証するため、次章ではロンドンの引受人とリヴァプールの引受人にみられる特徴を明らかにしたい。

### 3 ロンドンの引受人とリヴァプールの引受人の特徴

本章では、ロンドンとリヴァプールの引受人の職業や手形振出人との関係について改めて比較分析する。両都市所在の引受人の職業あるいは引受商会がどのような事業を展開していたのかという点について、受取手形記録から得られた引受人氏名を当時のディレクターや先行研究につき合わせて分析した。このほか、引受人と手形振出人の間には継続的な取引関係があったか否かという点についても検証する。

#### 3.1 職業

第2表はロンドンで引き受けられた為替手形の引受人(商会)名とその職業を示したものである。このリストを見ると、次に揚げるとおり、いくつかの特徴があることがわかる。

すなわち第1に、ロンドンの場合、引受人のかなり多くが金融機関、保険会社やコミッションエージェントである西インド商社にかかわっていたことが判明した。とくにピーター・テルソン (Peter Thellusson) はイングランド銀

行の理事を<sup>43)</sup>、ウィリアム・ボウズンケット (William Bosanquet) や西インド商社であるメイトランド=ボディントン商会 (Maitland & Boddington) のリチャード・メイトランド (Richard Maitland) は保険会社ロイヤルエクスチェンジアシュアランス (Royal Exchange Assurance) の理事を<sup>44)</sup>、ベンジャミン・ボディントン (Benjamin Boddington) はミリオン銀行 (the Million Bank) の理事を<sup>45)</sup>、トーマス・ボディントン (Thomas Boddington) はイングランド銀行の理事を務めていた<sup>46)</sup>。キンダー・メイソン商会 (Kinder Mason & Co.) のジョージ・メイソン (George Mason) やクラーモント=リンウッド商会 (Clarmont & Linwood) のニコラス・リンウッド (Nicholas Linwood), そしてハーレー=ドラモンド商会 (Harley & Drummond) のジョン・ドラモンド (John Drummond) はともに保険会社サンファイヤオフィス (Sun Fire Office) の理事であった<sup>47)</sup>。

このようにロンドンの名だたる有力金融機関の重要人物が奴隷貿易の資金決済に深く関わっていた事実はあらためて奴隷貿易金融におけるロンドンの重要性を示すものである。またダヴェンポート商会の受取手形記録における、ロンドンの引受人全体に占める有力金融機関役員の割合の高さも注目に値する<sup>48)</sup>。このほか、ロンドン引受人のなかには西インド商社を営む商人も多くみられ

43) Martin, Frederick (2008) *Stories of Banks and Bankers*, Biblio Life, pp.58-63.

44) 川分圭子 (1995) 「一八世紀のロンドン商人ボウズンキット家の事業展開」『史林』第78巻第5号、672頁；Anderson, B. L., (1977) *op. cit.*, p.77.

45) 川分圭子 (1992) 「ロンドン商人の社会的上昇——ボディントン家の場合——」『西洋史学』第165巻、8頁。

46) 川分圭子 (1992), 同上論文, 8頁。

47) Anderson, B. L. (1977) *op. cit.*, pp.74-75; Namier, Lewis and John Brooke (1964) *The House of Commons, 1754-1790*, Vol.1 (Survey constituencies Appendices), Published for the History of Parliament Trust by Her Majesty's Stationery Office, p.44; Gwyn, Julian (1980) "The Impact of British Military Spending on the Colonial American Money Markets, 1760-1783," *Historical Papers*, Vol.15, No.1, pp.78-79.

48) その他にもジョセフ・デニソン (Joseph Denison) とサイモン・フレイザー (Simon Fraser) はバンキングを行い、ブルデュー商会 (Bourdieu & Co.) は手形引受業を行っていた。Draper, Nicholas (2009) *The Price of Emancipations: Slave-Ownership, Compensation and British Society at the End of Slavery*, Cambridge University Press, p.244; Price, Frederick G. (1970) *A Handbook of London Bankers: With some Accounts of their Predecessors, the Early Goldsmiths*, New York : Burst Franklin, p.52; Morgan, Kenneth (2005) *op. cit.*, p.743.

第2表 ロンドンの引受人(商社)名とその職業

|  | 金融、砂糖<br>(西インド<br>商人含む) | 特定の出自* | 政治家 | 奴隷商人 |
|--|-------------------------|--------|-----|------|
| James Baillie & Co. <sup>(1)</sup>                     | ○                       | S      | ○   |      |
| William Beckford <sup>(2)</sup>                        | ○                       |        | ○   | ○    |
| William Bosanquet / Bosanquet & Co. <sup>(3)</sup>     | ○                       | H      |     |      |
| Bourdieu & Co. <sup>(4)</sup>                          | ○                       | H      |     |      |
| Lewis Chauvet <sup>(5)</sup>                           |                         | H      |     |      |
| Clarmont & Linwood / Gabriel Clarmont <sup>(6)</sup>   | ○                       |        | ○   |      |
| Joseph Denison <sup>(7)</sup>                          | ○                       |        |     |      |
| Simon Fraser <sup>(8)</sup>                            | ○                       | S      |     |      |
| Hambury & Gosling / Osgood Hambury <sup>(9)</sup>      | ○                       |        |     |      |
| Harley & Drummond <sup>(10)</sup>                      | ○                       | S      | ○   |      |
| Hibbert & Co. <sup>(11)</sup>                          | ○                       |        | ○   |      |
| Thomas & Rowland Hunt <sup>(12)</sup>                  |                         |        |     |      |
| Kinder Mason & Co. <sup>(13)</sup>                     | ○                       |        |     |      |
| Lane, Son & Fraser <sup>(14)</sup>                     |                         |        |     |      |
| Lascelles & Daling / Lascelles & Co. <sup>(15)</sup>   | ○                       |        | ○   |      |
| Maitland & Co. / Maitland & Boddington <sup>(16)</sup> | ○                       |        |     |      |
| Allan Marlar <sup>(17)</sup>                           | ○                       | I      |     |      |
| Peter Simond / Simond & Hankey <sup>(18)</sup>         | ○                       | H      |     |      |
| William Snell <sup>(19)</sup>                          | ○                       | I      |     |      |
| Peter Thellusson <sup>(20)</sup>                       | ○                       | H      | ○   |      |
| Trecothick & Apthorp <sup>(21)</sup>                   | ○                       |        | ○   |      |
| 計  | 18                      | 10     | 8   | 1    |

\*特定の出自：Hはユグノー系、Iはアイルランド系、Sはスコットランド系を示す。

- (1) Sheridan, R. B. (1958) *op. cit.*, pp.255-262; Hamilton, Douglas, (2005) *Scotland, the Caribbean and the Atlantic World, 1750-1820*, Manchester University Press, pp.84-111; Morgan, Kenneth (2005) *op. cit.*, pp.743-744.
- (2) Rawley, James A. and Stephen D. Behrendt, (1981) *The Transatlantic Slave Trade: A History, Revised edition*, University of Nebraska Press, pp.203-204; Hephaestus Books (2011) *Articles on West Indies Merchants, Including : Quintin Hogg (Merchant), William Beckford (Politician), William Paterson (Banker), Alexander McDonnell, Richard Rigby, Sir Francis Baring, 1<sup>st</sup> Baronet, Bryan Edwards, Sir John Gladstone, 1<sup>st</sup> Baronet, James Dick*, pp.4-5.
- (3) 川分圭子 (1995) 前掲論文. 672 頁.
- (4) Morgan, Kenneth (2005) *op. cit.*, p.743 ; Cullen, L. M. (2000) "Irish Businessman and French Courtier: the Career of Thomas Sutton, Comte de Clonard, c.1772-1782," in McCusker J. J. and Kenneth Morgan (ed.) *The Early Modern Atlantic Economy*, Cambridge University Press, pp.94-95; Jackson, D.

- and Dorothy Twohig (ed.) (1988) *The Diaries of George Washington*, Vol.6, University Press of Virginia, p.370.
- (5) Namier, L. B. (2006) "Anthony Bacon, M. P., An Eighteenth-Century Merchant," in Minchinton, W. E. (ed.) *Industrial South-Wales, 1750-1914 : Essays in Welsh Economic History*, Routledge, pp.73-74.
  - (6) Namier, Lewis and John Brooke (1964) *op. cit.*, p.44; Coker, Kathryn Roe (1995) "Absentees as Loyalists in Revolutionary War South Carolina," *South Carolina Historical Magazine*, Vol.96, No.2.
  - (7) Inikori, J. E. (2002) *Africans and the Industrial Revolution in England: A Study in International Trade and Economic Development*, Cambridge University Press, p.359; Draper, Nicholas, (2009) *op. cit.*, p.244.
  - (8) Baker, Norman (1972) "The Treasury and Open Contracting, 1778-1782," *The Historical Journal*, Vol.15, No.3, p.435; Dobson, David (2004) *Scottish Emigration to Colonial America, 1607-1785*, University of Georgia Press, p.178.
  - (9) Raven, James (2002) *London Booksellers and American Customers: Transatlantic Literary Community and the Charleston Library Society, 1748-1811*, University of South Carolina Press, pp.126-127.
  - (10) Taylor, Robert and Gregg Lint (ed.) (1977) *Papers of John Adams*, Vol.11 (January-September 1781), The Belknap Press of Harvard University Press, p.252, 518; Gwyn, Julian (1980) *op. cit.*, Vol.15, No.1, pp.78-79.
  - (11) Sheridan, R. B. (1958) *op. cit.*, pp.255-262 ; Burnard, Trevor (2009) "Credit, Kingston Merchants and the Atlantic Slave Trade in the Eighteenth Century," conference: Rethinking Africa and the Atlantic World (University of Stirling), (<http://www.britishearlyamerica.stir.ac.uk/conference/2009papers/TrevorBurnard.pdf>), 2012.5.10 取得 .
  - (12) Thomson, Robert Polk (1961) "The Tobacco Export of the Upper James River Naval District, 1773-75," *The William and Mary Quarterly*, 3<sup>rd</sup> Ser., Vol.3, p.405.
  - (13) Anderson, B. L. (1977) *op. cit.*, pp.74-75.
  - (14) Hunter, Phyllis Whitman (2001) *Purchasing Identity in the Atlantic World : Massachusetts Merchants, 1670-1780*, Cornell University Press, p.167.
  - (15) Pares, Richard, (1956) "The London Sugar Market, 1740-1769," *The Economic History Review*, 2<sup>nd</sup> Ser., Vol.9, No.2, p.254; Pares, Richard (1961) *op. cit.*, p.201; Smith, Simon D. (2003a) "An Introduction to the Lascelles & Maxwell Letter Books (1739-1769)," *Lascelles & Maxwell Letter Books*, Microfilm Academic Publishers, p.41; Smith, Simon D. (2003b) "Reckoning with the Atlantic Economy," *The Historical Journal*, Vol.46, No.3, pp.749-750; Truxes, Thomas (2004) *Irish-American Trade, 1660-1783*, Cambridge University Press, p.60; Sheridan, R. B. (1974) *op. cit.*, p.64.
  - (16) Anderson, B. L. (1977) *op. cit.*, p.77; Hamer, Philip M. (ed.) (1972) *The Papers of Henry Laurens*, Vol.3 (Jan. 1, 1759-Aug. 31, 1763), University of South Carolina Press, p.450; Truxes, Thomas (2004) *op. cit.*, p.60; 川分圭子 (1992) 前掲論文.
  - (17) Truxes, Thomas M., (2007) "London's Irish Merchant Community and North Atlantic Commerce in the Mid-Eighteenth Century," in Dickinson, David, Jan Parmentier and Jane Ohlmeyer, *Irish and Scottish Mercantile Networks in Europe and Overseas in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*, Gent Academia Press, p.274, 283.
  - (18) Hamer, Philip (ed.) (1979) *The Papers of Henry Laurens*, Vol.7 (Aug. 1, 1769-Oct. 9, 1771), South Carolina Historical Society, p.158.
  - (19) Truxes, Thomas M. (2007) *op. cit.*, pp.274, 279-280, 285.
  - (20) Martin, Frederick (2008) *op. cit.*, pp.58-63.
  - (21) Hamer, Philip (ed.) (1972) *op. cit.*, p.228; Bullion, John L. (1992) "British Ministers and American Resistance to the Stamp Act, October-December 1765," *The William and Mary Quarterly*, 3<sup>rd</sup> Ser., Vol.49, No.1, pp.100-105.

た。少なくともジェームズ・ベイリー商会 (James Baillie & Co.)<sup>49)</sup>、ウィリアム・ベックフォード (William Beckford)<sup>50)</sup>、ハンバリー=ゴスリング商会 (Hanbury & Gosling)<sup>51)</sup>、ヒバート商会 (Hibbert & Co.)<sup>52)</sup>、ラセルズ商会 (Lascelles & Co.)<sup>53)</sup>、メイトランド=ボディントン商会<sup>54)</sup>、アラン・マーラー (Allan Marlar)<sup>55)</sup>、ピーター・サイモンド (Peter Simond)<sup>56)</sup>、ウィリアム・スネル商会 (William Snell & Co.)<sup>57)</sup>、トレコシック=アプソープ商会 (Trecothick & Aphorp)<sup>58)</sup> は西インド商社として活動していた。このこと自体、先に指摘した奴隷貿易の手形引受は砂糖の委託販売に従事していたロンドン所在の西インド関連の商社、いわゆるコミッションエージェントが専門的に行っていたという事実を裏づけているといえよう。

第2に、ユグノーやアイリッシュという特定の宗派や民族的出自をもつ人物がロンドンの引受人のなかに多く含まれるという点も特徴的である。前述のピーター・テルソン<sup>59)</sup>、ウィリアム・ボウズンケット<sup>60)</sup>、ブルデュー商会 (Bourdieu & Co.) のジェームズ・ブルデュー (James Bourdieu)<sup>61)</sup>、ルイス・ショー

49) Sheridan, R. B. (1958) *op. cit.*, pp.255-262.

50) Rawley, James A. and Stephen D. Behrendt (1981) *op. cit.*, pp.203-204.

51) Raven, James (2002) *op. cit.*, pp.126-127.

52) Draper, Nicholas (2008) "The City of London and Slavery: Evidence from the First Dock Companies, 1795-1800," *Economic History Review*, Vol.61, No.2, pp.446-448; Janes, Michael (2010) *From Smuggling to Cotton Kings: The Greg Story*, Memoirs, pp.37-39; Morgan, Kenneth (2001) "The Dynamics of the Slave Market and Slave Purchasing Patterns in Jamaica, 1655-1788," *The William and Mary Quarterly*, 3<sup>rd</sup> Ser., Vol.1, p.213; Sheridan, R. B. (1958) *op. cit.*, pp.255-262.

53) Smith, Simon D. (2003b) *op. cit.*, pp.749-750; Truxes, Thomas M. (2004) *op. cit.*, p.60.

54) Hamer, Philip M. (ed.) (1972) *The Papers of Henry Laurens*, Vol.3, University of South Carolina Press, p.450; Truxes, Thomas M. (2004), *op. cit.*, p.60.

55) Truxes, Thomas M. (2007) "London's Irish Merchant Community and North Atlantic Commerce in the Mid-Eighteenth Century," in Dickson, David, Jan Parmentier and Jane Ohlmeyer (ed.), *Irish and Scottish Mercantile Networks in Europe and Overseas in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*, Gent Academia Press, pp.283-284.

56) Rogers, G. C. Jr. and David R. Chesnut (ed.) (1979) *The Papers of Henry Laurens*, Vol.7, University of South Carolina Press, p.158.

57) Truxes, Thomas M. (2007) *op. cit.*, pp.279-280, 284-285.

58) Hamer, Philip M. (ed.) (1972), *op. cit.*, p.228.

59) Martin, Frederick (2008) *op. cit.*, pp.58-63.

60) 川分圭子, (1995) 同上論文, 672頁.

61) Jackson, D. and Dorothy Twohig (ed.) (1988) *op. cit.*, p.370.

ヴェ（Lewis Chauvet）<sup>62)</sup>、ピーター・サイモンド<sup>63)</sup>はユグノー系ロンドン居住者であり、ウィリアム・スネル<sup>64)</sup>、アラン・マーラー<sup>65)</sup>はアイリッシュコミュニティのコミッションエージェントである。また、ジェームズ・ベイリー商会<sup>66)</sup>やサイモン・フレイザー（Simon Fraser）<sup>67)</sup>、そしてハーレー＝ドラモンド商会<sup>68)</sup>はスコットランド系であった。

第3は、政治との関係性である。例えばウィリアム・ベックフォード<sup>69)</sup>、ピーター・テルソン<sup>70)</sup>、クレアモント&リンウッド商会のニコラス・リンウッド<sup>71)</sup>、トレコシック＝アプソープ商会のバーロウ・トレコシック（Barlow Trecothick）<sup>72)</sup>、ハーレー＝ドラモンド商会のジョン・ドラモンド<sup>73)</sup>、ラセルズ＝デーリング商会（Lascelles & Daling）のダニエル・ラセルズ（Daniel Lascelles）<sup>74)</sup>は下院議員（MP）を務めた。そしてヒバート商会のトーマス・ヒバート（Thomas Hibbert）の甥であるジョージ・ヒバート（Geroge Hibbert）<sup>75)</sup>もまた下院議員を務めた人物である。

このように、ロンドンの引受人の多くは大手金融・保険会社、西インド商社、特定の出自、政治との関係が非常に強いことがわかった。この事実はまた、砂糖の卸売りや銀行、保険業で成功したロンドンの有力商人あるいは商会が

62) Namier, L. B. (2006) *op. cit.*, pp.73-74.

63) Rogers, G. C. Jr. and David R. Chesnutt (ed.) (1979) *op. cit.*, p.158.

64) Truxes, Thomas M. (2007) *op. cit.*, p.247.

65) Truxes, Thomas M. (2007) *ibid.*, p.274.

66) Hamilton, Douglas (2005) *op. cit.*, pp.84-111.

67) Dobson, David (2004) *op. cit.*, p.178; Price, Frederick G. (1970) *op. cit.*, p.52.

68) Gwyn, Julian (1980) *op. cit.*, pp.78-79.

69) Hephaestus Books (2011) *op. cit.*, pp.4-5.

70) Frederick, Martin (2008) *op. cit.*, pp.58-63.

71) Coker, Kathryn Roe (1995) *op. cit.*, p.123.

72) Hamer, Philip M. (ed.) (1972) *op. cit.*, Vol.3, p.228; バーロウ・トレコシックは他にもロンドン市会議員もつとめた。 Bullion, John L. (1992) *op. cit.*, pp.100-105.

73) Gwyn, Julian (1980) *op. cit.*, p.79.

74) Pares, Richard (1961) *op. cit.*, pp.201-202.

75) 彼はイートン・カレッジ、ケンブリッジに通い、芸術家のパトロン、市会議員、西インドドック会社（West India Dock Company）の初代会長などもつとめた。 Janes, Michael (2010) *op. cit.*, pp.38-39.

奴隷貿易を資金面から支えていたことを示唆している。

次は、リヴァプールについてである。第3表は同じくリヴァプールで引き受けられた為替手形の引受人(商社)名とその職業を示したものである。この表を一瞥すれば明らかなように、リヴァプールの引受人はロンドンの場合とは異なり、大手金融機関関係者や砂糖を扱うコミッションエージェントが占める割合が低いほか、政治への参加頻度も比較的少ない<sup>76)</sup>。実際、リヴァプールの場合、金融・保険機関や西インド商社に携わる引受人はロンドンほど多くない。タールトン家や銀行家のハイウッド家がリヴァプールファイヤオフィス(Liverpool Fire Office)に関わっていたこと<sup>77)</sup>と、ジョセフ・ダルテラ(Joseph Daltera)銀行業に携わったこととギル・スレイター(Gill Slater)が保険会社の理事をつとめたこと<sup>78)</sup>が挙げられるにとどまり、全体としてみるとロンドンのように大手金融機関の理事を務めたり、西インド商社としてコミッションを得ながら奴隷手形の引受業務を専門的に行う商会在引受人に名を連ねたりすることは少なかった。

もちろん首都と地方商業都市という違いが寄与しているが、西インド商社いわゆるコミッションエージェントについては砂糖の輸入量が大きく関係していると考えられる。先に指摘したように、コミッションエージェントの手形引受業務は砂糖の委託販売により支えられており、イギリスの砂糖輸入の大部分はロンドン向けであり、リヴァプール港の砂糖輸入量はわずかであった。例えば1773年の港別砂糖輸入量はロンドンの495,164バレルに対し、リヴァ

76) ジョン・タールトン(John Tarleton)とジョン・スパーリング(John Sparling)はリヴァプール市長をつとめた。そのほか、ジョン・タールトンは下院議員もつとめている。Hughes, John (2009) *Liverpool Banks & Bankers, 1760-1837: A History of the Circumstances Which Gave Rise to the Industry*, Biblio Life, pp.209-210; Howley, Frank (2008) *Slavers, Traders and Privateers: Liverpool, the African Trade and Revolution, 1773-1808*, Countywise, pp.172-173, 271; Schwarz, Suzanne (ed.) (1995) *Slave Captain: The Career of James Irving in the Liverpool Slave Trade*, Liverpool University Press, p.45.

77) Pearson, Robin and David Richardson (2001) "Business Networking in the Industrial Revolution," *Economic History Review*, New Ser., Vol.54, No.4, pp.664-665; Cameron, Gail and Stan Crooke (2001), *Liverpool Capital of the Slave Trade*, Picton Press, pp.51-52.

78) Pearson, Robin and David Richardson (2001) *op. cit.*, pp.664-666; Cameron, Gail and Stan Crooke (1992) *op. cit.*, p.52.

第3表 リヴァプールの引受人（商社）名とその職業

|  | 金融、砂糖<br>(西インド<br>商人含む) | 特定の出自 | 政治家 | 奴隷商人 |
|--|-------------------------|-------|-----|------|
| Benson & Postlethwaite <sup>(1)</sup>                      |                         |       |     |      |
| John Blackburne <sup>(2)</sup>                             |                         |       |     | ○    |
| Clay & Midgley <sup>(3)</sup>                              |                         |       |     |      |
| John Copeland <sup>(4)</sup>                               |                         |       |     | ○    |
| Crosbie & Trafford / Crosbie & Co. <sup>(5)</sup>          |                         |       |     |      |
| William Davenport / William Davenport & Co. <sup>(6)</sup> |                         |       |     | ○    |
| Dobson, Daltera & Walker <sup>(7)</sup>                    | ○                       |       |     |      |
| Joseph Fletcher <sup>(8)</sup>                             |                         |       |     |      |
| James France <sup>(9)</sup>                                |                         |       |     |      |
| Arthur & Benjamin Heywood <sup>(10)</sup>                  | ○                       |       |     | ○    |
| Peter Holme / Peter Holme & Co. <sup>(11)</sup>            |                         |       |     | ○    |
| John Powell <sup>(12)</sup>                                |                         |       |     |      |
| Rawlinson & Chorley <sup>(13)</sup>                        |                         |       |     | ○    |
| John Reynolds <sup>(14)</sup>                              |                         |       |     |      |
| Gill Slater <sup>(15)</sup>                                | ○                       |       |     | ○    |
| Sorocold & Jackson <sup>(16)</sup>                         |                         |       |     |      |
| John Sparling / John Sparling & Co. <sup>(17)</sup>        |                         |       | ○   | ○    |
| John Tarleton / Thomas Tarleton <sup>(18)</sup>            | ○                       |       | ○   | ○    |
| John Walker <sup>(19)</sup>                                |                         |       |     |      |
| Richard Watts / Richard Watts & Nephew <sup>(20)</sup>     |                         |       |     | ○    |
| 計  | 4                       | 0     | 2   | 10   |

- (1) Gore, John (1766) *Gore's Directory of Liverpool*, Liverpool & SW Lancs Family History Society; Truxes, Thomas (2004) *op. cit.*, pp.59-60.
- (2) Gore, John (1766) *op. cit.*; Cameron, Gail and Stan Crooke (1992) *Liverpool Capital of the Slave Trade*, Picton Press, 1992, p.39.
- (3) Gore, John (1766) *op. cit.*
- (4) Pope, David (2008) "The Wealth and Social Aspirations of Liverpool's Slave Merchants of the Second Half of the Eighteenth Century," in Richardson, David, Suzanne Schwarz and Anthony Tibbles (ed.), *Liverpool and Transatlantic Slavery*, Liverpool University Press, p.196, 209 (Appendix1.2).
- (5) Gore, John (1766) *op. cit.*
- (6) Anderson, B. L. (1977) *op. cit.*; Pope, David (2008) *op. cit.* (Appendix); Richardson, David (1998) *op. cit.*, pp.1-6.
- (7) Thomson, Robert Polk (1961) *op. cit.*, 1961, pp.397-398; Cameron, Gail and Stan Crooke (1992) *op. cit.*, p.52.
- (8) Gore, John (1790) *Gore's Directory of Liverpool*, Liverpool & SW Lancs Family History Society.
- (9) Gore, John (1766) *op. cit.*
- (10) Pearson, Robin and David Richardson (2001) "Business Networking in the Industrial Revolution," *Economic History Review*, New Ser., Vol.54, No.4; Pope, David (2008) *op. cit.* (Appendix).

- (11) Pope, David (2008) *ibid.*, pp.200-201 (Appendix1.2).  
 (12) Gore, John (1790) *op. cit.*  
 (13) Gore, John (1790) *ibid.*; Howley, Frank (2008) *Slavers, Traders and Privateers: Liverpool, the African Trade and Revolution, 1773-1808*, Countyvise, pp.272-273.  
 (14) Gore, John (1766) *op. cit.*  
 (15) Pearson, Robin and David Richardson (2001) *op. cit.*, p.666; Pope, David (2008) *op. cit.* (Appendix).  
 (16) Anderson, B. L (1977) *op. cit.*, p.74.  
 (17) Pope, David (2008) *op. cit.*, p.204, 214 (Appendix1.2); Howley, Frank (2008) *op. cit.*, pp.172-173, 271.  
 (18) Pearson, Robin and David Richardson (2001) *op. cit.*, pp.664-665; Pope, David (2008) *op. cit.*, (Appendix); Hughes, John (2009) *op. cit.*, pp.209-210.  
 (19) Gore, John (1766) *op. cit.*  
 (20) Gore, John (1766) *op. cit.*

プールは 64,168 バレルにとどまっていた<sup>79)</sup>。市場の規模やヨーロッパ各都市へのアクセス、三角貿易の構造変化から考えれば、こうした砂糖輸入に占めるロンドンの優位性は当然のことではあるが、それがまた、ロンドンを奴隷貿易のコミッションエージェント業に適した都市に仕向けたと考えられる。

これに対し、リヴァプールの引受人に見られる最大の特徴は、奴隷商人が多く含まれていることである。実際、ウィリアム・ダヴェンポート<sup>80)</sup>、タールトン家 (Tarleton)、ギル・スレイター<sup>81)</sup>、ピーター・ホーム (Peter Holme)<sup>82)</sup>、ジョン・スパーリング (John Sparling)<sup>83)</sup>、ヘイウッド家 (Heywood)<sup>84)</sup>、ジョン・コーブランド (John Copeland)<sup>85)</sup>、ローリンソン=ショーリー商会 (Rawlinson & Chorley)<sup>86)</sup>、ワッツ=ローソン商会 (Watts & Rawson)<sup>87)</sup>、ジョン・ブラックバーン (John Blackburne) はすべてリヴァプールの著名な奴隷貿易商人である。奴隷貿易商人が奴隷貿易手形の引受人に名を連ねることはやや奇異に感じら

79) 1 バレル = 0.25hhd. (ホグスヘッド) で計算。Morgan, Kenneth (1992) "Bristol and the Atlantic Trade in the Eighteenth Century," *The English Historical Review*, Vol.107, No.424.

80) Richardson, David (1998) *op. cit.*, pp.1-6.

81) Pope, David (2008) *op. cit.* (Appendix).

82) Pope, David (2008) *ibid.*, p.200, 211 (Appendix1, 2).

83) Pope, David (2008) *ibid.*, p.204, 214 (Appendix1, 2).

84) Pope, David (2008) *ibid.*, p.119, 214 (Appendix1, 2).

85) Pope, David (2008) *ibid.*, p.196, 209 (Appendix1, 2).

86) Howley, Frank (2008) *Slavers, Traders and Privateers: Liverpool, the African Trade and Revolution, 1773-1808*, Countyvise, pp.272-273.

87) Williams, Gomer (2004) *op. cit.*, p.669.

れる。この背景を探るべく、次に引受人、振出人相互間の関係性を検証することにした。

### 3.2 引受人、振出人相互間の関係性

まず、ロンドンでは奴隷手形を合計 21 人（社）の名宛人が 60 回引き受けていたが、そのうち 2 回以上の引受けを行った引受人は 13 人（社）である。第 4 表はこの 13 人と、彼らが引き受けた為替手形の振出人の人数を示したものである。以下、この表をもうすこし詳しくみることにしよう。

キンダー・メイソン商会が引き受けた為替手形は合計 17 回振り出されたが、それらはすべてジェームズ・モーソン（James Morson）とロバート・ヴァンス（Robert Vance）のパートナー会社が振り出したものであった<sup>88)</sup>。しかし、アンダーソンも指摘しているように 1776 年から 1777 年にかけて信用の収縮が広がった際には、ロンドンのキンダー・メイソン商会は彼らが振り出した手形の引受けを停止した。そうしたなか、一時的に約束手形の形態をとった時期を経て、これらの手形についてはすべてダヴェンポート自身が引受人となった<sup>89)</sup>。

リチャード・メイトランドとそのパートナーのベンジャミン・ボディントンの商社であるメイトランド商会（Maitland & co.）、メイトランド=ボディントン商会、B & T ボディントン商会（B. & T. Boddington）が引き受けた手形は、2 社が 4 回にわたって振り出した。4 回のうち 1 回はウィロック=モーソン商会（Willock & Morson）によって振り出されたが、残り 3 回の振出人はバイリー=フレイザー=バイリー商会（Baillie Fraser & Baillie）であった。

---

88) 実際に記入されている名義は Lovell Morson & Co. による 11 回、Robert Vance 個人による 3 回、James Morson Vance Caldwell による 3 回の計 17 回である。パートナーが変わる度に社名が変更されることや社名ではなく個人名義となることは、受取手形記録内でいくらかみられた。本章では振出人と引受人の間にみられる関係性を確認することが目的であるため、実質振出人という意味で社名と個人名の違いやパートナー解消に伴う社名の変更は同一商社とみなすことにした。

89) Anderson (1977) *op. cit.*, pp.73-74.

第4表 2回以上の引受けを行ったロンドン引受人とその回数、それらの振出人の人数

| 引受人                                       | 回数 | 振出人人数 |
|---|----|-------|
| Kinder Mason & Co.                        | 17 | 1     |
| Lane, Son & Fraser                        | 5  | 1     |
| Lascelles & Daling / Lascelles & Co.      | 5  | 1     |
| Maitland & Co. / Maitland & Boddington    | 4  | 2     |
| James Baillie & Co.                       | 3  | 2     |
| William Bosanquet / Bosanquet & Co.       | 3  | 3     |
| William Snell                             | 3  | 3     |
| Simon Fraser                              | 2  | 1     |
| William Beckford                          | 2  | 1     |
| Hibbert & Co. / Hibbert, Purrier & Horton | 2  | 1     |
| Harley & Drummond                         | 2  | 2     |
| Hambury & Gosling / Osgood Hambury        | 2  | 2     |
| Peter Simond / Simond & Hankey            | 2  | 2     |

(出所) *The Papers of William Davenport & Co., 1745-1797*, 1998, より筆者が作成。

同じように、レーン=サン=フレイザー商会 (Lane, Son & Fraser) やラッセルズ=デーリング商会 (Lascelles & Daling) とそれが再編されたラッセルズ商会 (Lascelles & Co.) は各5回手形を引き受けたが、それらの振出人はそれぞれ同一人物であった。サイモン・フレイザーやウィリアム・ベックフォード、ヒバート商会は各2回ずつ引き受け、それらの振出人はそれぞれ同一人物であった。ジェームズ・ベイリー商会が引き受けた3回に関しては、そのうち2回の振出人は同一人物であった。その一方で、ウィリアム・ボウズンケット、ウィリアム・スネル、ハンベリー=ゴスリング商会、ハーレー=ドラモンド商会、ピーター・サイモンドの5社は毎回異なる振出人の手形を引き受けた。コミッションエージェントが多く見られたため、通説のように西インド諸島在住のパートナー会社と安定的な関係性がロンドン引受手形では見られた。

次はリヴァプールについて考察したい。リヴァプールでは奴隷手形を20人(社)が66回引き受けたが、そのうち2回以上引き受けた引受人はロンドン

第5表 2回以上の引受けを行ったリヴァプール引受人とその回数、それらの振出人の人数

| 引受人   | 回数 | 振出人人数 |
|---|----|-------|
| William Davenport / William Davenport & Co.             | 20 | 10    |
| Peter Holme / Peter Holme & Co.                         | 9  | 7     |
| John Copeland   | 4  | 1     |
| James France  | 4  | 3     |
| Richard Watts / Richard Watts & Nephew / Watts & Rawson | 4  | 3     |
| Dobson, Daltera & Walker                                | 3  | 3     |
| Sorocold & Jackson                                      | 3  | 3     |
| Gill Slater   | 3  | 3     |
| John Tarleton / Thomas Tarleton                         | 2  | 1     |
| Clay & Midgley  | 2  | 2     |
| Crosbie & Trafford/Crosbie & Co.                        | 2  | 2     |
| Rawlinson & Chorley                                     | 2  | 2     |

出所：The Papers of William Davenport & Co., 1745-1797, (1998) より筆者が作成。

と同じく 12 人（社）である。しかし、ロンドンの場合とは異なり、安定的なパートナー関係が築かれていたとはいいたくない。第 5 表はリヴァプールの引受人のうち 2 回以上の取引を行った 12 人と、彼らが引き受けた手形の振出人の人数を表したものである。この表からも明らかのように、ダヴェンポート商會を名宛人とする為替手形は 20 回振り出された。これらは 10 人の振出人によって振り出されたものである。ただし、20 回のうち 8 回はヴァンス=コールドウェル=ヴァンス商會（Vance Caldwell & Vance）が振り出した手形である。先に指摘したように、これらの手形はロンドンのキンダー・メイソン商會が引受けを拒否したものであり、その代わりにダヴェンポートが引き受けることになったのである。これらの手形を除けば、ダヴェンポート商會宛てに 12 回振り出された手形は 9 人によって振り出されたことになる。

ジョン・コーブランドとタールトン家宛ての手形に関しては、ロンドンの引受人の場合に多く見られたように、それぞれ 4 回、2 回の手形振り出しの振出人はそれぞれ同一人物であった。ところがピーター・ホームとジェームズ・フ

ランス (James France), そしてリチャード・ワッツ (Richard Watts) がわずかに同一人物による振出手形を引き受けたことを除けば, その他のリヴァプールの引受人は毎回異なる振出人が振り出した為替手形を引き受けていたことが判明した。つまり, リヴァプールの場合, 奴隷手形の引受人は奴隷商人と安定的なパートナー関係を結んで継続的に引受業務を行っていたのではなく, 取引に応じてその都度, 為替手形の引受けが行われていたという傾向が読み取れる。

繰り返しになるが, 奴隷商人は18世紀後半, ロンドンのコミッションエージェントとコネクションを持たない奴隷ファクターとの奴隷取引については避ける傾向があった<sup>90)</sup>。この事実を踏まえて考えると, ロンドンの引受人はコミッションエージェントとして英領植民地の奴隷ファクターとの間で一定のコネクションを保持しており, それがまた奴隷販売を促進する方向で作用したといえる。これに対し, リヴァプールの場合, 奴隷貿易という当地が得意とする業務の円滑な遂行を目指して, ロンドンに適切な「ファイナンシャルバックカー」とのつながりを持たない奴隷ファクターが振り出す為替手形を, 円滑な奴隷貿易を目的とした一種の相互扶助の観点から他の有力奴隷商人が受け皿として引受人となっていた可能性がある。普段はロンドンのコミッションエージェントを名宛人としてきたような手形であっても, 彼らも無制限に膨大な金額の手形を引き受けることはできない。与信限度額を超えた場合においても, リヴァプールはひとつの受け皿として選択肢になりえただろう。

ただしダヴェンポートに代表されるリヴァプールの奴隷商人が自ら引き受けた為替手形の支払いに際し必要となった資金をどのようにして調達したのかは不明である。また, これらの手形の振出し以前に振出人とリヴァプールの引受人との間に債務関係があったかどうかについても確認することはできない。そのため, ロンドンのように砂糖委託と組み合わせた支払いが想定できないリヴァプールでの手形決済がどのように完結したのかはわからない。

90) Sheridan, R. B. (1958) *op. cit.*, p.261.

可能性としては最終的にはロンドンやブリストルなどの砂糖委託商を介して清算する方法や期日到来前に割り引く方法<sup>91)</sup>、直接西インド諸島からの入金を待つ方法などが考えられるが、証拠がないためこれ以上の議論ができない。

## おわりに

イギリスの奴隷貿易においてロndonは、西インド商社すなわちコミッションエージェントが為替手形を引き受けるというかたちで奴隷貿易を資金面から支えてきたという見方が通説として支持されてきた。しかし、この通説は経営文書によって体系的に確認されたわけではなく、その意味で仮説の域を出るまでには至っていない。アンダーソンもダヴェンポート商会の奴隷手形がロンドン宛であったのかリヴァプール宛であったのかという点を大きく意識しなかった。

本稿では、この仮説の妥当性についてリヴァプール所在の奴隷商社であるダヴェンポート商会の受取手形記録を利用して検証した。その結果、ロンドン所在の西インド商社に奴隷手形の引受けが集中していたことは否定された。リヴァプールの商人も奴隷手形の引受業務を一定の規模で行っていたことが判明したのである。コミッションエージェントに関しては、ロンドンのほかにブリストルなど地方でも見られ<sup>92)</sup>、ダヴェンポートの受取手形記録にもブリストルのコミッションエージェントによって引き受けられた手形が確認できた。しかし、西インド商人ではない奴隷商人による手形引受にはこれまで注目されてこなかった。実際、本稿において初めて明らかにされたように、

91) キングによると手形仲買人 (bill broker) は 1750 年以降、地方銀行の発展にともなって発達したようである。奴隷手形の流通に必要な下地は同時期に整っていたといえよう。しかし、少なくとも 1819 年ごろの証言では、手形の期間には大きくこだわらなかった仲買人であっても、ロンドン商社宛と地方商社宛であれば前者を好んだことがわかる。W. T. C. キング著、藤沢正也訳 (1977) 『ロンドン割引市場史』日本経済評論社、8-10、39 頁。また、ダヴェンポートは受取手形の多くの部分を期日到来前に割引によって処理していたことから、ダヴェンポート商社に限れば支払いを確実に受けたようである。それでも依然としてそれらの手形がどのようにして回収したのかの解答にはならない。

92) Morgan, Kenneth (1993) *op. cit.*, pp.185-208; Morgan, Kenneth (2004) *op. cit.*, p.184.

リヴァプールの場合、手形の枚数や引受金額の単純合計ではロンドンを大きく下回っていたが、奴隷手形の引受回数や引受人数を基準として計算したところ、ロンドンと比較しても大きく異なるところはなかった。このことはまた、同じような地域で振り出された奴隷手形であっても大口取引はロンドン、小口取引はリヴァプールというように一種の棲み分けができていたことを示唆している。

その一方で、ロンドンとリヴァプールとでは、手形の引受人の様相は大きく異なっていた。すなわち、ロンドンではコミッションエージェントや銀行・保険会社に関わる人物が多数みられたほか、イングランド以外に出自を持つ人物<sup>93)</sup>や政治家を経験した人物が多くみられた。これに対し、リヴァプールの引受人の場合、そうした傾向は見いだせなかった一方で、著名な奴隷商人が他の奴隷商人が受け取った手形の引受人となる事例が多数確認できた。このほか、ロンドンの引受人はコミッションエージェントが多く見られたため振出人である奴隷ファクターとの間で比較的安定・継続した引受業務を行っていたのに対し、リヴァプールの引受人においてはそのような関係性を見出すことはできなかった。

本稿で新たに確認されたこれらの事実は、これまで受け入れられてきた奴隷貿易手形の引受に占めるロンドンコミッションエージェントの役割を強調する通説に対し再考を迫るものであるといえよう。確かに奴隷貿易手形の引受市場において、当時ロンドンやブリストルに多く見られた西インド商社は大きな役割を担っていたが、通説の想定とは異なり、決して支配的なものではなかったのである。この点で、18世紀の奴隷貿易手形引受へのリヴァプー

---

93) 楊枝嗣朗は19世紀初頭のロンドン・シティではコスモポリタニズム、すなわち豊かな国際色に溢れていたことがその特徴であると主張しているが、本稿での分析対象となった18世紀後半の奴隷貿易手形の引受市場においても同様の特徴がすでにみられた。楊枝嗣朗(2004)『近代初期イギリス金融革命——為替手形・多角的決済システム・商人資本——』ミネルヴァ書房；また、シティを構成するマーチャントバンカーの中にはユグノー系の人々がみられた。スタンリー・チャップマン著、布目真生、荻原登訳(1987)『マーチャント・バンキングの興隆』有斐閣、2-9頁。

ル奴隷商人の寄与を強調しておきたい。

ただし、これらの結論は18世紀後半のリヴァプール所在のダヴェンポート商会という奴隷貿易商社の受取手形記録を利用した奴隷手形の引受人の分析結果に基づくものであり、その意味であくまで事例研究の域を出ないという限界を有している。しかし、リヴァプールの有力奴隷商人であったダヴェンポートの受取手形が分析対象となっているため、為替手形を用いた当時の奴隷貿易決済の形態を代表していると考えてもとくに大きな問題は生じないと判断できよう。

また、リヴァプール商人が奴隷貿易の手形引受業務に参入するようになった経緯や彼らが引き受けた手形の資金決済は最終的にはどのように行われたのかといった問題については、答えることができなかった。これらの問題については、今後の課題としたい。

（ながさわ せりか・同志社大学大学院経済学研究科後期課程）

## The Doshisha University Economic Review Vol.64 No.1

## Abstract

Serika NAGASAWA, *Guarantees of Bills of Exchange for the British Slave Trade: The Case of the Bill Book of William Davenport & Co.*

Payment in bills of exchange was popular in the British slave trade in the latter half of the 18th century. London commission agents and slave merchants in Liverpool accepted such bills. The former sustained the slave trade by means of abundant finance, while the latter provided credit in order to improve business transactions.